運命の「偶有性」から悲劇の「理念」へ
――書かれざる悲劇『エンペドクレスの死』――

畠　山　　寛

序

フリードリヒ・ヘルダーリン（1770-1843）は友人に宛てた手紙のなかで、「あらゆる文学形式のなかで最も厳格な」悲劇形式においては「どんな偶有性も断固として拒否」（VI, 339[1]）されなければならないと書いている。その手紙を書いたほぼ同時期に、ヘルダーリンは自らの編集で出版を予定していた雑誌『イドゥーナ』に掲載するため、悲劇『エンペドクレスの死』を起稿した。だがこれを完成させることなく、第二稿、第三稿と稿を改めた。この改稿過程において、ヘルダーリンは悲劇論『エンペドクレスの根拠』を書き、独自の悲劇の理念を明確にしようと努めたにもかかわらず、この作品は書き上げられることはなかった。第一稿、第二稿においては、エンペドクレスの死の根拠は、かれ自身の内的罪過であるヒュブリスだとされている。これに対し第三稿では、自然を見失った民衆のために犠牲[2]としてエトナ山の噴火口に身を投じ、火の中で

1　ヘルダーリンの作品からの引用は Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Friedrich Beißner, Adolf Beck und Ute Oelmann. 8 Bände, Stuttgart (W. Kohlhammer) 1943-1985 により、ローマ数字は巻数、アラビア数字はページ数を表す。

2　第一稿においても「犠牲」というモチーフがないわけではない（Vgl. IV, 81）。しかし、Alt も言っているように「最後の第三稿はエンペドクレスの犠牲的地位を強調し、それに引き換え、第一稿が輪郭を描き、第二稿で示唆されていたヒュブリスのモチーフを完全に消した」と考えることができるだろう。Vgl. Peter-André Alt: Subjektivierung, Ritual, implizite Theatralität. Hölderlins ‘Empedokles’-Projekt und die Diskussion des antiken Opferbegriffs im 18. Jahrhundert. In: Hölderlin-Jahrbuch 37 (2010-2011), S. 30-67, hier S. 53.

自然と合一することによって人間と神々を融和せしめ、世界の争いを和らげることこそが、エンペドクレスの死の意味である。ヘルダーリンによる数度にわたる改稿作業は、悲劇の主人公の歩みから一切の偶有性を排し、必然的なものとして根拠づけていく悲劇形式との格闘だったともいえる。本論文では第一稿と第二稿を座礁に至らしめたのはこの悲劇におけることばの機能であり、第三稿が破綻を来たしたのは、ヘルダーリン自身が見出した悲劇の理念それ自体によるものであったことを明らかにしたい。

1. 第一稿――予言し、意味づけることば

この劇の筋は、かつて親密な間柄にあった自然＝神々と不和に陥ったエンペドクレスが自然と和解して合一するためにエトナ山の火口に身を投じる、というものである。とはいえ、どの稿でもエンペドクレスが火口に飛び込む場面までは描かれていない。第一稿では、エンペドクレスが神々と不和に陥った主たる原因は、かれが民衆の前で自分は神であると名乗ったからだとされている。エンペドクレスの敵である神官ヘルモクラテスはこの事態を以下のように語る。

そこに
かれは虚ろに暗がりに座っている。神々が
かれの力を奪ったからだ、
あの酔い痴れた男が全民衆のまえで
自分が神であると名乗ったあの日以来。(IV, 10)

また、エンペドクレス自身も次のように語っている。

神々は
そうしてわたしに仕えるものであった、わたしひとりが
神であった、そして傲慢にも誇ってそれを口に出したのだ。(IV, 21)

エンペドクレスの弟子のパウサニアスは、「なんですって。ひとことのためにですか」(IV, 10) と、神々と不和に陥った原因がそのひとことのためだったということに驚く。ことばが決定的な事態を引き起こすという事例[3]をここに見ることができる。エンペドクレスの死のきっかけがかれ自身の発言であるように、この劇においてことばの果たす役割は極めて大きい。

ヘルモクラテスから呪いのことばをかけられて故郷から追放されたエンペドクレスが語るモノローグに、この劇におけることばの重要性が端的に表れている。

おお、静かな神々よ！　めぐみ深い神々よ！　つねに
死すべき人間の先を性急なことばは
いこうと急ぎ、成就の時を
手を触れなければ熟させることがない。(IV, 37)

ことばは「つねに」「性急」に人間の行動の先にあり、ことばが触れなければ「成就の時」は熟さない。だとすれば、自分の行為について前もって語るとき、それは自分に対して予言をすることになり、その予言が行為を惹起することになる。実際、第一稿において、ある決定的なできごとの前にその行動を説明することばが先だっているのを見ることができる。

神官に呪詛のことばをかけられたのちに、故国のアグリジェントから追放されたエンペドクレスは、弟子のパウサニアスとエトナ山を目指して山道を放浪する。このような悲劇的状況のなかで、エンペドクレスはパウサニアスによって差し出された泉の水を飲むという行為を通じて、自分の置かれている悲惨な状況が、再生に向かう状況であるかのように突然、認識を反転させる。

3　ことばによる罪がエンペドクレスが犯した最も大きな罪であるか否かは、さまざまに論じられてきた。いずれにしてもエンペドクレスの発話がかれ自身の運命において極めて重要な位置を占めていることには変わりはない。Vgl. Brigitte Haberer: Sprechen, Schweigen, Schauen: Rede und Hinblick in Hölderlins „Der Tod des Empedokles“ und „Hyperion“. Bonn; Berlin (Bouvier) 1991, S. 58ff.

エンペドクレス

あなたがたのためにこの水を飲もう！

なつかしく親しいものたちよ！　わが神々よ！

そしてわが帰還のために、自然よ！　はやくも

一変する。おお、慈しみ深いものたちよ！　あなたがたは

わたしが来る前から、そこにおられたか？　そして、花が咲くのだ

熟するまえには！――安心しなさい、息子よ。そして聞きなさい、

わたしたちは起ってしまったことについてもはや話はしない。

パウサニアス

変容されたのですね、目が

勝利者のように輝いています。これはどういうことでしょうか。(IV, 51f.)

エンペドクレス自身の内面の変化[4]がどこにも語られていないため、この作品における唯一劇的な場面はあまりにも唐突に見える。しかし、この場面の直前にエンペドクレスは自らの魂が水一杯で生き返ることをあらかじめ述べている。

見よ！　すぐそこに

泉がきらめいている。あれはわたしたちのものでもある。

きみの水入れを、瓠をもっていきなさい、飲んで

わたしの魂が甦るように。(IV, 51)

「泉」はエンペドクレスにとって、ただ身体の渇きを癒すものではなく、聖なるものであり、渇いている命を甦らせる源である。エンペドクレスにとって、神々との断絶とは内面の泉の枯渇でもあった。

4　上掲の箇所にはヘルダーリン自身による注がつけられており、「ここから、かれは、完全に以前の愛と力のなかにあって、より高次の存在のように見えなければならない」(IV. 2, 511) とある。

おお、聖なる泉にかけて、そこには静かに
水が集まり、渇いている者たちが
暑い昼には若返るのだ！　わたしのなかに
わたしのなかに、命の泉よ、かつておまえたちは
世界の深みからいっせいに流れ込み、渇いている者たちが
わたしのもとへやって来た――枯渇してしまったのだ
いまやそのわたしは、そしてもはやわたしを
喜びとする人間はいない――わたしはまったくの独りなのか。(IV, 14)

エンペドクレスにとって泉の水を飲むとは、神々の存在を再び感じることであり、まさに内面において生き返る行為であった。だが、さすらいのただなかにあって泉の水を飲む行為が、ただ身体の渇きを癒すのではなく、神々との断絶という内面の渇きをも潤わせる行為となったのは、その行為がエンペドクレス自身のことばによって前もって意味づけられていたからにほかならない。[5] エンペドクレスのせりふ、「花が咲くのだ／熟するまえには」とは、行為が「熟するまえに」、ことばという「花が咲く」ということなのであった。如上の引用で「ことばは……成就の時を／手を触れなければ熟させることがない」と、「ことば」が行為を成就させることを、「熟させる」、「熟する」という同じ動詞を用いて表現しているのは偶然ではない。

行為やできごとを意味づけることばが『エンペドクレス』の第一稿を宰領している。民衆がエンペドクレスと和解するために、エンペドクレスに対して許しを乞い、自分たちのもとへ戻ってきてほしいと懇願したとき、エンペドクレスはそれを拒否し、以下のように述べる。

5　Birkenhauer は、この場面においてエンペドクレスが自然に歩み寄ったのではなく、その逆に自然がエンペドクレスに歩み寄ったのであり、それによってエンペドクレスは自らのことばを取り戻した、と述べている。Vgl. Theresia Birkenhauer: Legende und Dichtung. Der Tod des Philosophen und Hölderlins Empedokles. Berlin (Vorwerk 8) 1996, S. 333f.

自分の運命ははっきりとわかっているし、はるか以前
青春の日にわたしは自分に
予言していたことである（IV, 73）

エンペドクレスはすでに若かりし頃、没落する自らの運命を予言し、その根拠を与えていた。ではなぜエンペドクレスは死を求めなければならなかったのか。それは死において初めて人間は、ことばによって意味が与えられることがない沈黙せる自然と合一することができるからである。神々＝自然がことばをもたない黙せる存在であることは第一稿の随所で言われている。

多くのことを神々は許し
黙っている（IV, 25）

神々しく現在する自然に
ことばは要らない。（IV, 69）[6]

エンペドクレスは沈黙の場である神々の世界、すなわち自然へと急ごうとする。それはつまり、エンペドクレスが人間のことばを拒否しているということでもある。

もはや、
わたしがなにを悩み、わたしが何者であるかについて、
多くのことばを費やしているときではない。
果たされたことだ、もう決して知りたくはないのだ。（IV, 55）

6　ほかの箇所にも以下のようにある。「神々はきっとそんなことを許します、神々は／沈黙を通したではないですか、あの方が辱められ／故郷からみじめな境遇へ追いやられたときも。」（IV, 46）

だからこそエンペドクレスは、アグリジェントに戻ることよりも、ことばもなく荒々しい自然のただなかで過ごすほうを選ぶ。

わたしはむしろ
ことばなく異郷者のように山の獣と
雨と灼熱の太陽のなか生き、食べ物も
獣と分け合うほうがよいのだ、ふたたび
おまえたちの盲目なみじめな境遇のなかへ帰るくらいなら。(IV, 57)

このように第一稿ではことばが行為を統べ、できごとを約束する。ことばが前もって述べるできごとの蓋然性が高いということではない。ことばが希求であり、願いであるかぎりにおいて、ことばは同時にそのことばを発する者を拘束もし、導きもする。このような世界にあってことばが理解不能なものとして立ち現れるとすれば、それが約束している行為は無意味なものとなり、エンペドクレスの悲劇もまたありえないものとなる。だが、まさにそのような事態が起きている。アグリジェントの市民はエンペドクレスのことばをまったく理解しないのである。「理解できません／あなたがおっしゃったことばが、エンペドクレスさま」(IV, 62)。「かれはなんと言ったのか」(IV, 22)、「いったいどういうことでしょう、ヘルモクラテスさま、なぜ／この男はあのような奇妙なことを言っているのですか」(IV, 24)。また、市民はそもそもエンペドクレスのことばを聞こうともしていない。「立ち去れ！　わたしたちはおまえの言うことはなにも／聞きはしない」(IV, 30)、「まだかれはわたしたちを罵るのか。おまえへの呪詛を思い出すがよい／そして話すことなく去れ！　さもないとわたしたちは／おまえに手を掛けるぞ」(IV, 30)。エンペドクレスのことばを理解しない市民[7]は、エンペドクレスがなそうとすることも理解できず、エンペドク

7　Grätz は第一稿に関して、「この悲劇は核においてモノローグ的である」と述べている。Vgl. Katharina Grätz: Der Weg zum Lesetext: Editionskritik und Neuedition von Friedrich Hölderlins »Der Tod des Empedokles«. Tübingen (Niemeyer) 1995, S. 14. なお、Haberer が

レスの没落の必然性も理解しない。エンペドクレスが前もって自らの行為にことばで意味を付与しても、それは通じず[8]、エンペドクレスの悲劇は成就しない。作品内におけることばの機能そのものが、作品の完成を不可能にしてしまっているのである。

2. 第二稿――自然が求めることば

第二稿では自然が黙せる存在であるという言語観が深められ、自然には自身の代わりに語ってくれる人物が必要だとされる。

きみたちがわたしを敬うのは正しい、
なぜなら自然は黙しているからだ。
　…（中略）…
　　わたしのために
力と魂を取り交わしひとつになっている、
死すべき者たちと神々が。（IV, 95）

この後、異文として「ことばをわたしが沈黙する神々に与えたからだ」（IV. 2, 594）という一文が書き加えられている。第二稿におけるエンペドクレスは自

指摘しているように、アグリジェントの市民がエンペドクレスのことばを避けるのは、エンペドクレスとの会話を禁じたヘルモクラテスの呪詛にその理由の一つをあげることができるが、その呪詛が解かれた後のエンペドクレスの「遺言」をも市民が理解できないことからして、そもそもエンペドクレスと市民間の相互理解が不可能であることが示されている。Vgl. Haberer, S. 98ff. また、Birkenhauer は「アグリジェントの市民は成熟しておらず（unmündig）、自分自身のことばを持っていない」と述べている。Vgl. Birkenhauer, S. 134.

8　Strunk はエンペドクレスとイエスの類似点として、「ヨハネの福音書」における弟子たちがイエスが死に向かう理由を理解しないことを挙げている。「ヘルダーリンによるエンペドクレスの死の解釈はヨハネ神学の中心的内容を参照することなしにはほとんど考えられない」。Reiner Strunk: Echo des Himmels. Hölderlins Weg zur poetischen Religion. Eine Einführung. Stuttgart (Calwer) 2007, S. 203.

然の代わりに語り、そのことばは人間と神々を結びつける力をもつ。エンペドクレスはさらに、「わたしが／異質なものを集わせ、／未知なものにわたしのことばが名をあたえ、／生あるものたちの愛を／わたしがここそこへともたらす」(IV, 95) とも言っている。つまり、自然が人間に対して存在するためにはエンペドクレスのことばが必要なのである。

そもそもいったい空も海も
島も星も、そして人間の
目の前にあるすべても、
死んだ弦の調べであったろう、わたしが音色と
ことばと魂を与えなければ。
神々もその霊もなんであろう、もしわたしが
告知しなければ。(IV, 109)

第二稿では、エンペドクレスは沈黙する自然を名づけ、自然の代弁者となることによって、自然を人間のために存在させる。だが、まさに自然に存在の意味を与えたことがエンペドクレスの没落の原因となっている。[9] エンペドクレスが自然は自分のことばを求めていると考え、自然の上に位置して自然に対してことばを与えることから、エンペドクレスのことばが自身の没落を招く「ヒュブリス的意識の道具」[10] であることが見て取れるのである。エンペドクレスは自然にことばを与える過程でほどを踏み越え、それがヘルモクラテスをしてエンペドクレスは「語ってはならぬことを語ろうと」(IV, 97) し、「神を無駄口で追いやってしまった」(IV, 98) と断罪せしめるのである。まさに、ことばはエ

9　Haberer もまた、第二稿においてもエンペドクレスによる「ことばの罪」はあるものの、その力点は第一稿とは異なり、自己自身を神とみなしたことではなく、神的なるものの秘密を漏らしたことにあるとしている。この点に関し、第一稿のエンペドクレスはタンタロスと比せられるが、第二稿のエンペドクレスはプロメテウスと比せられる存在となっている。Vgl. Haberer, S. 74.
10　Vgl. Grätz, S. 15

ンペドクレスにとって諸刃の剣であり、桎梏でもあった。しかし、エンペドクレスにとってことばは、自らに孤立をもたらすだけではなく、世界を変える力ももっていた。第二稿におけるエンペドクレスの最後の台詞である。

沈黙した力にみちて、大いなる自然が
予感する人間を包んでいるのだから、
世界をかたちづくり、
自然の霊を呼び出すように、
深く根づいた
力強い憧れが人間を上へと促すなら。
多くのことを人間はなしうる、そして、すばらしいのだ
人間のことばは、それは世界を変える（IV, 110）

第二稿は散佚した部分が多いとされているが、そもそもヘルダーリンは第二稿も書き上げてはいない。だが現存している原稿から、紛失した部分、たとえば、ヘルモクラテスの呪詛の台詞などは第一稿と似たものであることが推測でき、構想に関して第一稿と大きな変化はなく、依然としてエンペドクレスのことばは劇中の登場人物には理解されないままであろう。第二稿において言語観の深まりは認められるものの、それによってエンペドクレス自身の死の根拠づけが可能になるわけではなく、エンペドクレスのなそうとしたことは無意味なまま宙に漂ってしまっているのである。

3.『エンペドクレスの根拠』――悲劇の理念

第二稿の後に書かれた『エンペドクレスの根拠』は、公にするべく書かれた文章ではなく、全体の表題も編集者による。この論考は三つのまとまりから成り、後の二つにはヘルダーリン自身により「一般的根拠」、「エンペドクレスの根拠」という見出しがつけられている。この文章が悲劇的頌歌（オーデ）の考察から書き

始められているのは、これが悲劇の核心をなすと考えていたからだろう。「一般的根拠」の冒頭でヘルダーリンは悲劇を構成する核心的な要素として「親密性の過剰」を挙げている。

> 悲劇的劇詩において表出されるのは、限りなく深い親密性である。悲劇的オーデは、親密なものを限りなく具体的な区別、現実的対立においても表現するが、これらの対立はむしろ形式のなかにこそ、感覚の直截的なことばとして存在している。(IV, 150)

「親密なもの」が表現される個別具体的な「現実的対立」は悲劇の人物において表現される。悲劇とは、この対立を表すことばによって、たんなる対立ではなく「調和的対立」を描くものである、とするのがこの悲劇論の主旨である。この論考の中心部である「エンペドクレスの根拠」では、具体的に悲劇『エンペドクレス』執筆のための「根拠」を考察している。ここでもやはり、冒頭から悲劇の核心である「自然と人為の調和的対立」について述べられている。

> 自然と人為は、純粋な生においてはただ調和的に対立している。人為は、自然の華であり完成である。自然は、多様ではあるが調和的な人為との結びつきよってはじめて神的となる。(IV, 152)

この調和的対立の中心にいるのが、「かれの天の、かれの時代の、かれの祖国の子、自然と人為の激しい対立の子」(IV, 154)、エンペドクレスである。ここには『エンペドクレス』の構想の決定的改変が認められる。すなわち、エンペドクレスは時代の運命の「犠牲」として規定されているのである。

> かれの時代の運命は犠牲を要求した。この犠牲においては、全的な人間が、現実的に可視的にかれの時代の運命を解決するように見えるものになるのであり、また、両極が、一者において現実的に可視的に合一するように見

えるが、まさにそれゆえ、あまりにも親密に合一しており、イデアールな行為において、個人はそれゆえに没落するし、没落しなければならない。なぜなら、その個人において、運命の問題を解決した窘迫と軋轢から生まれた感性的合一が、尚早に現れたのであるから。(IV, 156)

第一稿、第二稿とは異なり、エンペドクレスは自らの罪過により死すべき運命が与えられるのではなく、自然と人為とが分離してしまった時代の運命を担い、その分離を自身の死でもって融和させ、新しい世界を開くための「犠牲」となっている。[11] エンペドクレスの死の根拠がエンペドクレス自身から離れることで、個人の運命を描く劇としての因果律は弱いものとなる。第一稿、第二稿ではエンペドクレスは自身の運命を成就するために、あらかじめ、ことばによって自身の行為を説明し、意味づける必要があった。そうしてエンペドクレスは民衆に対してこれからなされる自死を説明し、遺言を語った。だが、第三稿への過程にいたると、エンペドクレスの没落は前もってかれ自身のことばで意味づけられるのではなく、時代の運命によって外側から要請されるものとなっている。時代の運命を担うことになったエンペドクレスは、自身の運命を理由づけ、意味づける必要から解放される。だからこそ『エンペドクレスの根拠』では、たとえ逆説的に聞こえようとも、時代の運命の担い手であるエンペ

11　ヘルダーリンはほとんど執拗ともいえるほど、エンペドクレスの運命について表現を変え、繰り返し説明している。「したがって、エンペドクレスは、すでに述べたように、かれの時代の結果なのであり、かれの性格は、それがかれの時代から生まれたのと同様、かれの時代を振り返り指し示す。かれの運命は、かれの内に、瞬間的な合一の中にある。だがこの合一は、さらに大きなものとなるために、解体しなければならない。」(IV, 155)「このようにしてエンペドクレスは、かれの時代の犠牲とならなければならなかった。かれがそのなかにあって生長した運命の諸問題は、かれにおいて見かけ上、解決されなければならなかったのであり、この解決は、多かれ少なかれすべての悲劇的人物においてそうであるように、見かけ上、一時的な解決であるものとして示されなければならかった。」(IV, 157)「このように、かれの時代はエンペドクレスにおいて自己を個別化する。そして、時代がエンペドクレスにおいて個別化すればするほど、かれのなかで謎が、ますます輝くように、ますます現実的に、ますます明白に解決されたように見えれば見えるほど、かれの没落はますます必然化する。」(IV, 158)

ドクレスは自由であり、「最高の自主性において、たとえ、客観的、歴史的状況がなくとも、かれの歩みを指し示す状況において生きた」(IV, 160) とされる。これで確かにエンペドクレスの運命の偶有性が排され、その死は必然性を帯びるかのように見える。だが、これによりヘルダーリン自身繰り返しこの論考で述べているように、エンペドクレスの死の意味をいかに叙述するかの問題が焦点化されるようになる。いずれにしても、このようにヘルダーリンは大幅にエンペドクレスの死の根拠を問い直したうえで第三稿の執筆に向かうのである。

4. 第三稿――ことばを失ったエンペドクレス

ほかの人物がエンペドクレスの惨めな状況を客観的に語る場面で始まる第一稿、第二稿に対し、第三稿はエンペドクレス自身の「目覚め」から始まる。この時点ですでにエンペドクレスはアグリジェント市民とその王である自身の兄から追放されて、エトナ山の高みに来ている。神官や民衆との対話という第一稿、第二稿における中心的なできごとはすでに過ぎ去っており、自分の運命に躊躇し、悄然とうなだれるエンペドクレスの姿はない。

エンペドクレス
（眠りから覚めて）
おまえたち、真昼の熱い日射しよ、
おまえたちを野に呼び入れて
ゆっくりと流れる群雲から、おまえたち、こよなく熟れたものよ、
わたしはおまえたちによってこの新しい生の一日を知る。
これまでとは一変しているからだ！　過ぎ去った、過ぎ去った
ひとの憂いは！　まるで羽が
生えたよう、ここは、こんなにも心地よく軽やか、
この高みでは、ここで、ゆたかに、よろこばしく、
壮麗にわたしは住もう。(IV, 121)

いまやエンペドクレスは過ぎ去ったことを嘆かない。必然を前にして、かれは自由であり、嘆きもないその当然の帰結として、希求もなく、その振る舞いも毅然としたものとなる。第三稿では、時代の運命を担う存在であるエンペドクレスは、自身で自らの死の根拠や自らの行動の意味を語る必要がなくなっているゆえ、弟子のパウサニアスに助言を求められたとき、直接答えることなく[12]次のように言う。

いろいろと
言うべきなのであろうが、黙っていよう。
はかない会話にはほとんど
またむなしいことばにはこの舌は決して仕えようとしない。(IV, 132)

しかし、自身のことばが死の根拠となるのでなければ、どのようにエンペドクレスの死は劇中で根拠づけられるのか。老賢者マーネスの登場は、まさにこの点に関わっている。ヘルダーリンは劇の内部に悲劇的事象が何なのかを把握し、解釈する者が必要だと考え、第三稿では、遠くエジプトからやってきた老賢者マーネスを登場させ、かれにエンペドクレスの死の真意を質させる。[13]しかし、エンペドクレスはまたもや問いに直接答えることをしないばかりか、そもそも語ることを拒否する。

マーネス
死者は、おまえが尋ねても語らない。

---

12 パウサニアスへと語られたエンペドクレスの表現には「ことばを通じて働きかけることの可能性への懐疑」が見て取れる、とした解釈もある。Vgl. Birkenhauer, S. 503.
13 Lemke は、上掲のエンペドクレスとパウサニアスとの対話において、エンペドクレスは解釈する力の限界を固持し、もはや神的なるものの告知者として行為しておらず、その役割はエンペドクレスから彼の好敵手であるマーネスに移っているとしてい る。Anja Lemke: Die Tragödie der Repräsentation － Theater und Politik in Hölderlins ‘Empedokles’-Projekt. In: Hölderlin-Jahrbuch 37 (2010-2011), S. 68-87, hier S. 85.

だがことばが必要なら、聞くがよい。

エンペドクレス

わたしを呼ぶ声はすでに聞いた。

マーネス

では、その声と語ったのか。

エンペドクレス

語ってなんになるのか、異国の方よ！（IV, 134）

しかし、エンペドクレスの死が自死である以上、その行為に意味を与える者がいなければ、その死はただの偶有的な死でしかなくなり、悲劇は成立しない。マーネスはその任において、エンペドクレスを試すことになる。[14] 第三稿の最後の場面は以下の通りである。

マーネス

わたしにすべてを語ったわけではないのか。

エンペドクレス

その通りだ！

マーネス

それなのにもう行くのか。

エンペドクレス

わたしはまだ行かない、ご老人よ！

---

14 マーネスはエンペドクレスの行為の解釈者ではなく、自死することの唯一可能な理解をエンペドクレスに知らせる存在だと考えることもできる。ただし、エンペドクレスの死に対するこの両者の理解には明らかな隔たりがある。Vgl. Birknehauer, S. 528, S. 550f. なお、マーネスについてのさまざまな解釈は以下を参照のこと。Vgl. Birkenhauer, S. 518ff. また、Rühle によれば、マーネスのこの問いは、エンペドクレスにもう一度、自分自身がマーネスによって喚起された救済者像にふさわしいかどうかを確認し、自身の死の根拠を見いだすために自分の決断の由来を思い起こすよう促すものである。Vgl. Volker Rühle: Verdichtete Zeit. Schöpferische Konsequenz und geschichtliche Erfahrung im Blick auf Hölderlin. München (Wilhelm Fink) 2010, S. 150.

この緑のみごとな大地から
わたしの目はよろこびもなく去りはしない。
それにまだ、過ぎ去った時のことを思いたい、
若かりし日の友人たちのことを、
遠くギリシアの喜ばしい都市に住む大切なひとたちのことを、
わたしに呪いをかけた兄のことも。あれは
やむをえないことだった。いまはひとりにしてくれ、あそこに日が
沈んだなら、また会えるだろう。(IV, 139f.)

第三稿でもエンペドクレスの死の場面は先送りにされ、描かれていない。ヘルダーリンは、この後に十行近くのメモを書き留め、この稿も未完成のままに残した。しかしその後も『第三稿継続草案』を書いており、そこでもマーネスはエンペドクレスが去った後、すなわちエトナ火山に身を投げた後に、民衆にエンペドクレスの最後の意志を伝える人物とされている。[15] 第三稿では、エンペドクレスの行為を説明するのはかれ自身ではなく、残された者たちが現実的な解体としてのエンペドクレスの死を理念的な解体へと、想起を通じて昇華させるはずであった。だがそれも計画に終わり、この劇が書き上げられることはついになかった。『エンペドクレスの根拠』で闡明した悲劇の理念である、自然と人為の過剰な親密の解体としての死は、悲劇形式で書かれうるものではなかったのだ。偶有性が排された醇乎たる悲劇の理念は劇形式において言語的形象を得ることはできないのである。

だが、ヘルダーリンが数度の改稿を経て、なおかつ悲劇論を書きながらも作品を書き上げることができなかったというのは、たんにこの作品の失敗を語るものではない。むしろ重要なのは、ヘルダーリンが自らに示した課題を徹底的

15「すべてを聞き知る者、予言者であるマーネスはエンペドクレスの語りとかれの精神に驚愕し、かれこそが殺し、蘇生する使命を授かった者、かれにおいて、かれを通じて世界が解体し同時に更新される者だ、と言う。…（中略）…その翌日、サトゥルヌスの祭りに、かれは人々にエンペドクレスの最後の意志がなんであったのかを告げる。」(IV, 168)

に考え抜き、それが悲劇形式では解決できるものではないという認識を得たことであろう。ヘルダーリンは『エンペドクレス』という悲劇形式を手放したその同じ手で、悲劇の理念を純粋に表現する端緒を掴んだのである。ヘルダーリンはここで『エンペドクレス』を終わらせることなく、この悲劇の理念を『滅びの中の生成』という論考で一般的な状況に置き直して改めて解釈を行なうのである。

5.『滅びの中の生成』――空白を書くために

この文章も『エンペドクレスの根拠』と同様、表題はついておらず、公にするつもりのものではなかったと思われる。この論考が『エンペドクレス』群に属していることは、その冒頭の文章からも見て取れる。[16]

> 没落する祖国は、自然と人間は、特殊な相互作用をおよぼし合い、特殊なイデアールになった世界を、そして、さまざまな事物の結合を形成する限りにおいて、そして、その限りにおいて解体する。(IV, 282)

ここでも、『エンペドクレスの根拠』で言及されていたのと同じく、「自然」と「人為」とが交じり合い、合一し、再びその合一が解体されていくさまが論じられている。この論考で特に着目すべきなのは、『エンペドクレスの根拠』においても特徴的であった撞着語法が、より激しい表現となって散見することである。冒頭からしてすでに、悲劇とは矛盾の瞬間であることが示されている。「特殊なイデアールになった世界」がそれである。「イデアール(ideal)」とは、「理念的」、「理想的」であるだけではなく、「普遍的」、「一般的」であるということも含意している。「普遍」でありながら「特殊」であるとは、極めて矛盾した表現で

16 この論考と悲劇『エンペドクレス』との関連性については以下を参照のこと。Ernst Mögel: Natur als Revolution. Hölderlins Empedokles-Tragödie. Stuttgart; Weimar (Metzler) 1994, S. 67ff.

あるが、悲劇的事象は撞着語法でしか言い表しえないということを示しているといえるだろう。この論考では、悲劇的事象を説明している個所に「有限的無限的なもの」、「個的永遠的なもの」といった撞着語法が多く見られる。悲劇の核心である「イデアール的解体」の

> どの点も、自身の解体と創造において、解体と創造の全体感情と無限に絡み合い、すべてが、痛みと喜び、闘争と平和、運動と静止、形姿と無形姿において無限に浸透し合い、接触し合い、関わり合い、そのようにして地上的な火に代わり、天上的な火がはたらきを現す。(IV, 284)

対立し合うものが「無限に浸透し合」うとは、矛盾が具現化[17]するさまをいっているのであろう。ヘルダーリンが『エンペドクレス』という作品を繰り返し書いていくなかで考察してきた悲劇の理念を叙述する方途としての撞着語法を、対話形式において表出することがいかに難しかったかが、ここに至って歴然とする。以下の文章から、いったいどのような具体的な悲劇的場面を考えることができるだろうか。

> 無限的新しいものと有限的古いものとのこの悲劇的合一から、こうして、新しい個的なものが発生する。無限的新しいものが、有限的古いものの形姿をとったことによって、いまや固有の形姿のうちに個的にされるからである。(IV, 286)

実際の劇作品から離れて悲劇的事象を純化して語る文章は撞着語法に満ち満ちており、この文章から具体的な作品を想像することは極めて難しい。だがこ

17 Dahlke は、このようなヘルダーリンの撞着語法、二項対立がいわゆるヘーゲル的な弁証法とはことなり、「綜合」へと至るのではないことを指摘している。Vgl. Karin Dahlke: Äußerste Freiheit. Wahnsinn / Sublimierung / Poetik des Tragischen der Moderne. Lektüren zu Hölderlins Grund zum Empedokles und zu den Anmerkungen zum Oedipus und zur Antigonä. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2008, S. 227.

れは決して悲劇の理念が曖昧であるからでも、抽象的な理論を展開しようとしているからでもない。悲劇的事象を純化して語るということこそが、ヘルダーリンにとっての実際的な詩学だったのである。だがこの詩学と実際の劇形式の間にはすでに大きな径庭がある。

また、この撞着語法に基づく悲劇観は、後期ヘルダーリンの讃歌の世界を予感させる歴史哲学に基づいていることも看過できない。悲劇的事象は、それを受け取る者がそのただなかにあっては理解することはなく、想起されて初めて悲劇となるがゆえに、想起を生じさせるものとともに、想起する者が必要なのである。

> 現実が解体することによって現実のなかにはいってくる可能態、これが作用し、解体の感覚も、解体されたものの想起も生じさせる。(IV, 283)

だからこそ、この解体は「イデアールな想起の観点において」「回顧」となる。解体の想起とは、その解体について説明し、解釈し、意味を与える、ということにほかならない。悲劇的事象である解体には説明が必要なのである。解体はそれ自身「空隙」としてしか存在していないからである。

> したがって必然的なものとしての解体はそれ自体、イデアールな想起の観点において、新しく展開された生のイデアールな対象として、辿られなければならなかった道のりへの回顧となる。すなわち、解体の始点から、新しい生のなかから解体されたものへの想起が生じ、そのなかから、空隙と、新しいものと過ぎ去ったもののあいだに生じる対比とを説明し合一するものとして、解体の想起が起こりうる地点までの道のりへの回顧となる。(IV, 283)

これがこの短い論考で書かれている悲劇の核心部分である。『エンペドクレス』群から連綿と続くヘルダーリンの悲劇の考察を辿っていくと、この論考は

いわば、書かれなかった悲劇作品への『注解』と読める。では、この注解が向けられている悲劇作品はどこにあるのか。この文章は第三稿が書かれたノートの続きの右半分にだけ数ページ書かれており、その左半分は空白のまま残されている。この空白にこそ、書かれることがない悲劇作品があり[18]、この注解はその空白への注解なのではないか。『エンペドクレス』群の最後の改稿はこの空白を書くことだったのである。

18 Dahlke もまた、あたかもこの空白部分に悲劇の続きが書かれるかのように見えると指摘している。Vgl. Dahlke, S. 197. 確かにこの空白部分は、本来は第三稿の続きを書くために空けられていたのであるが、この論考を書くことで、悲劇形式で続けて書くことが決定的に不可能であることがヘルダーリンには、はっきりとわかったと考えたほうがよい。